

第5章 おわりに

**~ 三重県の未来のために、
共に行動を起こしません
か~**

(三重県の未来のために)

- 平成 19(2007)年 12 月、「みえ地域ケア体制整備構想」を策定し、30 年先を展望して、三重県の置かれた状況と今後の施策の方向性を関係者間で共有し、共に歩み始める標(しるべ)を提示しました。そして、本プランでは、2009(平成 21)年度から 2011(平成 23)年度までの**3 年間の、県としての戦略と具体的行動(アクション)**を定めました。
- 理想論を言う人は沢山います。また、理想論を言うのは簡単なことです。批判もまた同じです。**理想論や批判ではなく、具体的に行動を起こすことが一番難しいのです。**仮に小さな歩みであったとしても、**全ての物事は動き出すことから始まります。**
- ある著名な学者の著書に、「**夢見ながら耕す人になれ**」という言葉があります。「夢を見る」というのは、理想を追いかけることであり、より良い社会にしようとする夢を持つことです。「耕す」というのは、目の前のことをきちんと行うことです。
- この言葉のとおり、**30 年先の三重県の未来予想図の実現を追いかけながら、目の前の 3 年間の取組を着実に進めていくことが必要**です。
- そして、**県だけでは、三重県の未来予想図を実現できません。**これからは**地域が主役**であり、地域を構成する全ての**関係者が共に手を取り合いながら進んでいく**ことが求められています。まずは、地域・地域で、地域の将来を見据えて、地域住民のケアの在り方を考え、行政機関、住民、保健・医療・福祉の関係者といった**地域を構成する全ての皆が同じ方向性を持つこと(ベクトルの向きを同じにすること)**が必要です。
- 地域ケアとは、言い換えれば、地域を構成する皆のチームケアです。チームケアのためには、**リーダーやコーディネーターに「情熱(パッション)」と「つなぐ力」が、ケアチームに「つながる力」**が必要です。そしてチーム内で円滑につながるためには、「**コミュニケーション**」が必要不可欠です。
- 関係者間でコミュニケーションを取り、方向性の共有化を図ることができたとしたら、**二歩目は事例を学ぶ**ことです。“学ぶ”という言葉は、“真似ぶ(まねぶ)”に由来します。**学ぶとは、即ち、真似ること**です。
- 本プランでも多くの事例を紹介しましたが、各地域には優れた取組が沢山あります。**現場は宝の山**です。これらを**皆で共に、学び、考え、そして、具体的な行動に結びつけていく**ことが、今、求められています。
- 従来までの計画は、ともすれば、サービス供給量の提示に重きが置かれ、施設整備を希望する者が施設整備可能数を確認するための物となっていました。今回、**本プランは、県としての戦略と具体的行動を明確にするとともに、「皆に読んでもらえる計画」とすることを基本的な視点**としています。
- **本プランが多くの人の目に触れ、共に行動を起こすキッカケになることを期待しています。「三重県の未来のために、共に行動を起こしませんか」**

【コラム 28】

各地で芽生えている地域ケア確立に向けた取組

松阪市の「地域けあネット」

- 松阪市第一地域包括支援センター担当地区(殿町・久保中学校区)に勤務先を有する介護支援専門員及び高齢者ケア専門職、さらに松阪地区医師会会員などが参加する形で、地域マップの作成などを通じて、保健・医療・福祉課題の共有と社会資源の開発を目指す取組が進められています。
- 定期的に集まり、事例検討、勉強会、情報交換などを通じて自らの支援技術を振り返り、高齢者ケア専門職としての資質向上に取り組むとともに、ネットワーク構築を進めています。



写真 地域マップの作成に向けて

地域ケア研究会議

- 「人々が住み慣れた地域でいつまでも安心して生活できるための地域社会」の実現を考えると、人口動態・経済・福祉・医療・介護・食事・住居等様々な課題が事業者・専門家の前にあります。そして、一人ひとりの住民の「well-being」の確保・維持・向上は関係する全ての事業者・専門家・住民・行政等が統合的に協働作業を行っていくことが強調されています。
- こうした中で、「地域ケア体制」構築のために、福祉・医業・介護・行政等の関係者が研究討議のプラットフォームに共に集まり、新たな研究と実践を推進することが必要との認識の下、県内の事業者が「地域ケア研究会議」を立ち上げています。

